虐待の起こりやすい環境と被虐待児の行動様式

安藤 久美子　　岡田 幸之
（東京医科歯科大学難治疾患研究所　社会医学研究部門）

<要旨>

われわれは、1999年4月から2000年3月までの期間に首都圏近郊の一児童相談所に通報された被虐待児133名を対象に、彼らの行動様式について調査解析した。虐待の発生が確認されたもののうち、年齢が3歳以上で、解析に必要な情報が得られた対象者は102名であった。子どもたちの行動に関する20項目について、家庭内および学校や近隣などを含めた家庭外の2つの視点から、精神科医2名が3点リッカートスケールで評価した。この評価得点を用いて因子分析を行った結果、4つの因子が抽出された。因子得点を用いてクラスター分析を行ったところ5つの型に分類され、その特徴から「過剰適応型」「萎縮・服従型」「平均型」「分離・独立型」「逸脱行為型」と命名された。行動様式の5型と性別や虐待の種類との関係はなかった。「逸脱行為型」は「過剰適応型」「萎縮・服従型」「平均型」に比較して年齢が有意に高かった。これらの結果から、被虐待児への介入にあたっては虐待の種類だけでなく、ひとりひとりの子どもたちの示す行動様式によって検討する必要があることを示した。また、彼らの示す行動様式は年齢的な成長によって変化していく可能性についても示唆した。

<key word>

児童虐待、行動様式、因子分析、クラスター分析

はじめに

米国では、すでに1960年代から児童虐待が重要な社会問題として取り上げられており、現在では、全州で「児童虐待通告法」が制定されている。そして1年間に300万件以上の虐待に関する通報がなされ、約100万件の虐待が確認されている。わが国においても、近年、社会的に大きな注目を浴びるようになっており、平成11年度の虐待に関する相談件数は1万件を超えた。平成8年の相談件数と比較するとおよそ2倍の件数に増加しているが、この急激な増加は虐待件数の増加を示しているのではなく、ようやく実態が明るみに出るようになった結果と考えられる。

米国では、長期に反復する心的ストレスによって引き起こされる障害として、複雑性外傷後ストレス障害 complex PTSD が提唱されている(Herman JL-a)。これはまだ未確立な診断概念ではあるが、その症状群はアメリカ精神医学会によるDSM-IV (APA)の中にある外傷後ストレス障害 PTSD の診断基準に準じて考えられている。長期にわたってストレス下に置かれるという点では、児童虐待はこの障害の要因となる重要な外傷体験のひとつといえる。なかでも成長過程にある子どもにとって、より深刻な症候として考えられているのは人格の深遠に与

える影響である(Terr L)(Herman JL-b)。虐待を受けてきた子どもたちがこのような障害に発展することを防止するためには、早期の介入が必要と考えられる。

有効な援助を行うにあたっては、現在虐待を受けている子どもたちの実態およびその状態について把握することが重要と考えられるが、われわれは多くの虐待を受けてきた子どもたちと接する中で、彼らの対人的な行動様式が一様でないことを感じてきた（安藤ら）。そこで今回、虐待の発生する環境についてまとめ、さらに被虐待児の対人的行動様式を類型化することを試みた。

対象と方法

対象は平成 11 年度に首都圏の一児童相談所に通報された被虐待児 133 名である。虐待通報がなされた場合、はじめに児童福祉司が虐待事実の確認作業を行い、各児童に関する情報を収集する。次に介入が必要と思われたケースについては各種心理検査が施行され、同時に児童福祉司、心理判定員と精神科医によって面接調査が行われる。上記の手続きにより得られた情報に基づき、虐待の発生する背景に関して統計解析を行った。次に、子どもたちの行動様式について調べるため、子どもたちの「生活能力・社会適応」、「攻撃性」の２つの因子を想定し、それぞれについて５項目を設定した。さらに、家庭内での行動と学校や保育施設などの家庭外での行動が異なることを仮定し、全項目を家庭内外の両視点に分けて設定した。これらの合計 20 項目について、精神科医 2 名が 3 段階のリッカートスケールで判定した（表 1)。精神科医 2 名による評価の一致率（Chlonbach's α）は 0.85 であった。上記の手続きにより得られた評価得点を用いて虐待環境における行動様式について、Varimax 法による因子分析を行った。次に、各個人の因子得点に基づいて、得られた因子について Ward 法によるクラスター分析を行った。

なお、解析には SPSS ver.10.0 を使用した。

表１：評価項目

			家庭内	家庭外	採点方法		
生活能力・社会的役割		1	家庭での生活習慣の自立度	学校生活での自立度・態度（出席・学習／身の回りの整頓 など）	役割を果たす程度	不足	1
		2	家庭での表情表出・積極性など	学校での表情表出・積極性など		年齢相当	2
		3	家事などの手伝い	学校／課外活動（係・役割／宿題・遊び など）			
		4	家族内での適応・きょうだいの面倒など	友人・知人・教師との適応・社会性		過剰	3
		5	家庭での注意力・落ち着き	学校での注意力・落ち着き			
攻撃性	対人暴力	1	家族・動物に対する暴力・虐待行為	友人・知人・動物に対する暴力・虐待行為	攻撃性の程度	なし	1
	対物暴力	2	物を乱暴に扱う・破壊行為	物を乱暴に扱う・破壊行為			
	規則違反	3	（虐待にあたらない程度の）親の指示を守らない	社会一般的な規則・校則を守らない		ややあり	2
	虚言	4	家族に大きな嘘をつく	友人・先生に大きな嘘をつく		あり	3
	窃盗	5	家の金を盗む	万引き			

注：ここでいう「家庭外」とは学校、就学前の保育などを含む。また、地域社会における活動、近隣者からみた家庭外での態度なども考慮して評価した。

結果

(1) 対象者の特徴

通報を受けた被虐待児133名のうち、虐待の事実が確認されたケースは123名であった。そのうち本研究の対象者の条件は次の通りとした。

1）被虐待児の年齢が3歳以上であること
2）本人あるいは養育者から信憑性のある情報が得られること
3）学校や保育所などに通っており、第3者による客観的な情報が得られること

これらの条件に基づいて、詳細な情報が得られた対象者は102名（男性50名、女性52名）であった。年齢は3歳から17歳で、平均年齢は7.4±4.1歳であった。厚生省（現 厚生労働省）が定めた虐待の4つの形態に従って、主たる虐待について分類した結果、身体的虐待は67例、心的虐待は8例、性的虐待は8例、ネグレクトは19例であった。また明らかな虐待の重複が認められたケースは39例で全体の38.2%を占めており、身体的虐待と心理的虐待の重複が14例と最も多く、次に身体的虐待とネグレクトの重複が10例であった。虐待者の分類では、同居している家族による虐待が97例（95.1%）と殆どを占めていた。また、今回の通報以前に1回以上の通報を受けていたケースは11例（10.8%）であった。

(2) 行動特性の因子分析

虐待環境における行動特性を調べるために表1に示した20項目の変数について因子分析（主因子法，Varimax回転法）を行った。その結果、固有値1.00以上で4つの因子（累積寄与率は85.2%）が抽出された。回転後の因子負荷行列を表2に示した。

第1因子は、「家庭での適応・きょうだいの面倒」と「家庭での注意力・落ち着き」の負の得点群と「家庭における規則違反」「家族への虚言」「家族に対する攻撃性」「家庭での対物的な攻撃性」の正の得点群を含む6つの変量からなっており、ここでは**「家庭内行動」**とした。第2因子は「生活習慣の自立度」「家庭での家事などの手伝い」と「家庭での表情表出・積極性」の正の得点群と「学校や保育施設などでの友人や教師に対する虚言」「学校や保育施設などでの規則違反」「学校や保育施設などでの友人に対する攻撃性」と「学校や保育施設などでの対物的な攻撃性」の負の得点群からなっており、これは**「社会適応・規範行動」**とした。第3因子としては、「学校や保育施設など家庭外での表情表出・積極性」「学校・課外活動（係・役割／宿題・遊びなど）」「学校や保育施設などでの行動の自立度（出席状況・学習・身の回りの整頓など）」「学校および保育施設などでの注意力・落ち着き」「友人・教師との適応・社会性」が抽出され**「家庭外行動」**とした。第4因子は「家庭での金銭等の持ち出し」と「万引き」の2つの変数からなっており**「窃盗行為」**とした。

表2：回転後の因子負荷行列

項目			因子			
			1	2	3	4
家庭内	攻撃性	3	.893			
家庭内	攻撃性	4	.889			
家庭内	攻撃性	1	.888			
家庭内	攻撃性	2	.834			
家庭内	役割	4	−.772			
家庭内	役割	5	−.770			
家庭内	役割	1		.838		
家庭内	役割	3		.822		
家庭外	攻撃性	4		−.767		
家庭内	役割	2		.754		
家庭外	攻撃性	3		−.737		
家庭外	攻撃性	1		−.622		
家庭外	攻撃性	2		−.601		
家庭外	役割	2			.918	
家庭外	役割	3			.894	
家庭外	役割	1			.864	
家庭外	役割	5			.740	
家庭外	役割	4			.635	
家庭内	攻撃性	5				.681
家庭外	攻撃性	5				.647

注：項目名については表1参照。ただし本表の「役割」は表1の「生活能力・社会的役割」を示す。

(3)クラスター分析

各個人の回転後の因子得点を用いてクラスター分析（Ward 法）を行ったところ、5クラスターに分類された。各クラスターの人数はクラスター1は 27 名（26. 5%）、クラスター2は24名(23.5%)、クラスター3は27名(26.5%)、クラスター4は 14 名（13. 7%）、クラスター5は 10 名（9. 8%）であった。各クラスターの関係は図1に示したとおりである。

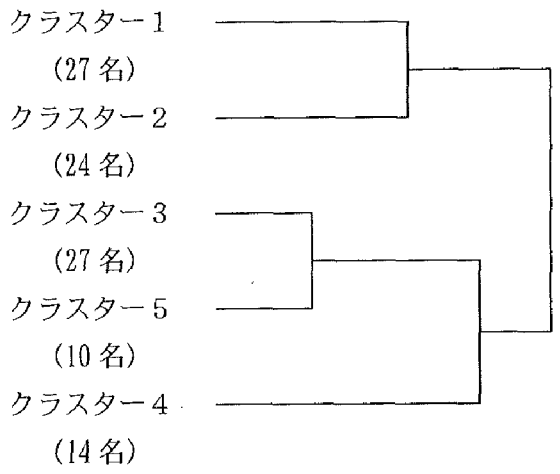

図1：クラスター分析によるデンドログラム

クラスター1の特徴としては「家庭外行動」の得点が5群の中では最も高く、反対に「家庭内行動」得点が低かった。クラスター2の特徴としては、「家庭内行動」「家庭外行動」の2因子とも低く、「社会的役割・規範行動」は 5 群の中では2番目に高い値を示していた。クラスター3では、「社会的役割・規範行動」、「家庭外行動」と「窃盗行為」の得点がやや低かったものの、全体的にほぼ平均的な値を示していた。クラスター4では、「社会的役割・規範行動」および「家庭内行動」が5群の中では最も高かった。クラスター5の特徴としては、「窃盗行為」得点が他群に比較して極めて高く、反対に「社会的役割・規範行動」は低い値となっていた。

(4) 各クラスターと諸変数の関係

これらの5つのクラスターについて、その他の変数との関係を調べた。虐待の種類と各クラスターとの間には有意な関係はみられなかった（$\chi^2(3)=.229$, n. s.）。被虐待児の年齢と各クラスターとの間には、有意な関係が見られ（$F(4,97)=3.358$）$p=.013$)、Scheffe 法による多重比較の結果、クラスター5の一群はクラスター1、クラスター2とクラスター3の3つの群に比較して 5%水準で年齢が有意に高かった。ただし、クラスター4とクラスター5の間では有意な差は見られなかった。性別と各クラスターの関係には有意な差は見られなかった。同様に、家族形態（両親のいる核家族、片親の核家族、複合家族）についても各クラスターの間で有意差は認められなかった。家族の人数および兄弟の人数については、Kruskal Wallis 検定を行った結果、各クラスター間に有意な差は見られなかった。

考察

（1）被虐待児の行動因子

本研究では、子どもたちの行動様式が家庭内と学校や保育施設などの家庭外では異なっていることを仮定し、同一の項目を家庭内と家庭外に区別して評価した。因子分析の結果、「窃盗行為」を除いて、同一因子に家庭内外の同じ評価項目が含まれることはなかった。この結果は、われわれの仮定を支持するものであった。

攻撃性に関する項目は、アメリカ精神医学会の DSM-IV にある行為障害の逸脱行動のリストを参考にして作成したが、因子分析の結果抽出された因子は、家庭の内外に関わらず「窃盗行為」の項目だけが独立していた。したがって「窃盗行為」は数々の問題行動の中でも特異な性質をもっており、行為障害に該当する可能性のある対象者を鑑別する際に重要な役割を果たす可能性があると考えられた。

（2）被虐待児の類型化

被虐待児の行動様式から類型化された5つのクラスターについて、それぞれの特徴を説明する。また、各クラスターに該当したケースのう

ち、典型的と思われるものを１例ずつとり上げた。なお、プライバシー保護のためケースの詳細には一部変更を加えた。

１．クラスター１；過剰適応 over adjustment 型

クラスター１（n＝27、26．5％）では「家庭外行動」の得点が高く、「家庭内行動」の得点が低くなっている。学校での学習態度は真面目で積極的であり、友人らとの関係も良好であることを示している。また、家庭内での攻撃性は低く、注意力や落ち着きに関する問題もみられないと考えられる。この群の被虐待児は家庭の内外において非常に適応度の高い行動様式をとっており、虐待環境においてもいわゆる「優等生」的な振る舞いをしていることから、「過剰適応型 over adjustment type」と考えられた。次のようなケースが例としてあげられる。

＜7歳女性　A＞
父親からの身体的虐待
（2人同胞第1子、核家族）

家庭では夫婦喧嘩が頻繁であり、Aは幼少時から喧嘩に巻き込まれて父親から暴力をふるわれていたという。通報時の所見でも、頭部および身体に幾つかの皮下出血が認められた。Aは、普段から家事や妹の面倒などを任されている。両親に反抗的な態度をとることは一切なく、両親はAのことを「いい子」であるという。学校では真面目で努力家であり、学業成績も優秀である。学級委員を務め、クラスをまとめたり課外活動にも積極的である。性格は明るく活発で友人も多いという。

この型の子どもたちは Barker の指摘する“役割の逆転 role reversal”あるいは“親を世話する reversed caring”といった行動様式を示していると思われた。本研究では虐待環境にある者のうち４分の１以上の者がこのような行動様式をとっていることが明らかになった。

２．クラスター２；萎縮・服従 shrink/passive obedience 型

クラスター２（n＝24、23．5％）の特徴としては、「家庭内行動」「家庭外行動」の２因子が低かった。これは、家庭内での攻撃性および家族への対応は「過剰適応型」と同様の傾向を示している。また、「社会適応・規範行動」は５クラスターの中で２番目に高い値を示しており、学校などでの攻撃性は低く、社会的規範を逸脱する問題行動は認められないと考えられた。しかし一方で、「家庭外行動」得点の低さから考えると、学校などでの行動は全般的に消極的で、実際に、不登校（登校の禁止を除く）となっているケースも含まれていた。また、交友関係は乏しく、家庭外では落ち着きを欠く傾向も窺われた。したがって、この一群は家庭内外ともに消極的で、虐待環境において明らかな抵抗や反抗を示さないことが特徴と考えられ、ここでは「萎縮・服従型 shrink/passive obedience type」とした。次のようなケースが例としてあげられる。

＜7歳男性 B＞
母親からの身体的虐待とネグレクト
（同胞なし、母子家庭）

Bは、幼少時より行動が遅いことなどで母親から叱責を受けることが多かった。家庭では非常におとなしく、母親の顔色を窺って行動しており、反抗的な言動は全く見られないという。児童相談所の職員が自宅を訪問した際には、Bは部屋の隅に隠れて大人たちの様子を覗うような様子が見られた。学校では大人しく目立たない方で、学校での活動には非常に消極的であるという。虚言や逸脱行動などは認められない。一時保護した際には、大人がBの前に立ったり、頭を

撫でようとして手を伸ばしたりすると、B は思わず手で頭や体をかばうような姿勢をとったり、「悪い子だから殴ってもいいよ」という場面もみられた。

Romans らは性的虐待歴と自己評価の関係について指摘している。本研究では標準化された尺度による自己評価/自尊心評価は行っていないが、この型に該当した子どもたちの行動特性は、彼らの自己評価の低さを反映している可能性がある。また、本研究の結果では、性的虐待がこの群に有意に多いわけではなかったことから、虐待の種類に関わらず、虐待環境にあることは子どもたちの自己評価を低下させる可能性が示唆された。

3．クラスター３；平均 average 型

クラスター３（27 名、26．5％）は「社会的役割・規範行動」、「家庭外行動」と「窃盗行為」の得点がやや低い傾向ではあったが、他のクラスターに比較すると平均的な値を示していた。この型の被虐待児は、家庭外ではまれに攻撃的な行動をとる可能性はあっても、目立った逸脱行動は見られない。また、家庭内においても家族や虐待者に対する過度な迎合あるいは過度な反抗などの特徴もみられないと考えられる。したがって先の４因子を基準に考えると、行動様式には特に偏りがみられない一群であることから、「平均型 average type」とした。次のようなケースが例としてあげられる。

<10 歳男性　C>

継母からの心理的虐待

（２人同胞第１子、核家族）

２歳時に両親が離婚し、数年前に再婚した。家庭では義弟と喧嘩すると、必ず C だけが怒られていたという。また、些細なことで継母から叱責を受けることも多かったという。時に C は継母に対してふてくされた表情を見せることはあったが、反抗的な行動をとることはなかったようである。学校での成績は中程度で、とくに目立った問題行動はなく、学級のなかでは比較的適応しているという。

4．クラスター４；分離・独立 detached/independent 型

クラスター４（n＝14、13．7％）は、「社会的役割・規範行動」および「家庭内行動」が５群の中では最も高かった群である。つまり、社会的役割を果たし、社会における規範を逸脱することはない一方で、家庭内では攻撃的な行動を示し、注意力や落ち着きに関しても何らかの問題を抱えている可能性がある。しかし、家庭外での攻撃性や窃盗などを示す２因子は５群の中では低い値であったことから、家庭外での逸脱行動や問題行動はみられず、適応していると考えられる。今回の研究対象者の殆どが家庭の中で虐待を受けていたという背景を考えると、この一群は虐待行為に対しては抵抗を表現するものの、一般的な社会的規範から逸脱することはないと言える。すなわち、虐待者の価値観に迎合しない、独立した価値観を築いていると考えられ、ここでは「分離・独立型 detached/independent type」とした。次のようなケースが例としてあげられる。

<12 歳女性　D>

父親からの身体的虐待とネグレクト

（３人同胞の第２子　父子家庭）

家庭では兄弟仲は良く、家事は兄弟で協力して行っていた。父親に対しては、時に乱暴な口調で抗議したり、反抗することがあったという。学校では、成績は中程度であるが能力は高いと評価されている。友人も多く、適応は非常に良く、逸脱行為は認められない。一時保護時には弟の面倒をみたり、消極的な姉を支えてリードしていく様子が観察された。面

接では年齢より大人びたしっかりとした口調で語り、礼儀正しい態度であった。しかし、家庭に関する話題になると、父親のことを「あの人」と呼び、虐待行為を非難する発言がみられた。

5．クラスター5；逸脱行為 deviant behavior 型

クラスター5（n＝10、9．8％）の特徴としては、「窃盗行為」得点が他群に比較して極めて高く、反対に「社会的役割・規範行動」は非常に低い値となっていた。「家庭内行動」は「分離・独立型」と同様に高い値を示していた。これらの特徴からは、一般的な社会規範を逸脱した行動が多くみられる一群と推測され、「逸脱行為型 deviant behavior type」とした。次のようなケースが例としてあげられる。

<7歳女性　E>

母親からのネグレクトと身体的虐待

（1人同胞の第1子、母子家庭）

母親は仕事のため深夜に帰宅することが多く、Eとの接触は非常に少なかった。Eは深夜まで徘徊したり、他人の器物をむやみに損壊させるといった行動が何度も確認されている。また、万引きをして店員に見つかると「母親に知られたら殺される」と泣き、万引き行為を許してもらっては、同じ方法で万引きを繰り返していた。母親はそれらの行為についてEを叱責したが、一向に行動が修正されなかったため、本児を叩いたり、タバコの火を押し付けようとしたこともあったと認めている。学校では遅刻や欠席が多く、服装や身の回りも、だらしがないという。学習態度は悪く、学校行事にも拒否して参加せず、教師に反発することも多いようである。また、友人の持ち物を壊したり、盗んだりしたために、交友関係は次第に乏しくなっていったようである。

「家庭内行動」、「家庭外行動」と「窃盗行為」の因子の一部は DSM-IV にある行為障害の診断基準と重複する内容で構成されており、「逸脱行為型」の一部の者は行為障害の診断基準を満たしている可能性がある。Green らは、被虐待児を DSM-Ⅲに基づいて診断すると PTSD の他に不安障害、感情障害や行為障害に該当するとしている。これまでの研究では、虐待歴と成人後の反社会的行動との関係は強調されていないが(Brown GR)、今回の結果では反社会的行動を示す者が含まれていたことから、こういった面にも焦点をあてた早期の治療的介入の必要性が示唆された。

（3）行動様式の類型と虐待環境との関係

ここまでに5型の行動様式に分類されたが、これらを分ける要因としてはどのようなものが関係しているのだろうか。

虐待の種類と行動様式の型との関係を分析したところ有意な差は見られなかった。同様に、性別についても有意差は見られていない。しかし、年齢を比較してみると「逸脱行為型」は「過剰適応型」「萎縮・服従型」と「平均型」に比べて有意に高くなっていたが「分離・独立型」との差は見出されなかった。これは、家族による保護から独立し、経済以外の面で自立できる年齢になった被虐待児は、反社会的な行為を呈する群と社会的に適応していく群に分かれることを予想させる結果であった。また、兄弟の人数やその続柄と行動様式の類型との間に有意な関係は認められていない。したがって、子どもたちの行動様式は、家庭の中の位置付けによって決定されるのではなく、個人の要因がより大きく関係しているのかもしれない。

虐待の発生しやすい環境についてはこれまでに様々な要因が指摘されてきた(Straus MA)。子どもの頃に両親が離婚するといった経験は、その後の発達にも深刻な影響を及ぼすことが指摘されている(Kalter N)。加えて、欠損家族の場合、虐待が発生する要因になりやすいとも

言われている。しかし、今回の結果では家族形態との間にも有意な関連は示されてなかった。ただし欠損家庭の割合は27．5％と全体の４分の１以上を占めており、これは対象者の居住する都市における父子・母子家庭の割合が約12％であることに比較すると２倍以上の高い数値を示していると言える。

子どもの頃に性的虐待を受けたサバイバーは成人後にも不安や対人関係の過敏さ、怒りのコントロール不足などの心理的機能に問題を抱えていることが指摘されてきた（Murphy SM）。性的虐待と人格障害の関係についても多くの研究者によって報告されている（Gunderson JG ら）。もちろん、子どもの頃に虐待を受けた経験は、必ずしも将来の心理学的問題に発展するわけでない（Browne ら）。しかし、本研究の結果は、現在虐待を受けている子どもたちの多くがすでに何らかの問題となる行動を呈していることを明らかにしたといえよう。また、虐待の種類と行動様式の型との関係は示されなかったことから、今後、より有効な介入方法を検討するにあたっては、虐待の種類に関わらず、それぞれの子どもたちの行動様式が重要な役割を果たすと考えられた。

まとめ

平成 11 年度に、首都圏一児童相談所に通報された被虐待児 133 名を対象に調査を行った。対象となったのはそのうちの 102 名で、彼らの行動様式からクラスター分析を行った。その結果「過剰適応型」「萎縮・服従型」「平均型」「分離・独立型」「逸脱行為型」の５型に分類された。各型と虐待の種類の間には有意な関係が示されなかったことは重要である。継続的治療を行っていく際には、虐待の種類だけでなく、むしろ個人の行動様式によってその介入方法を検討することが有用であると考えられた。また、「逸脱行為型」は他の型に比較して年齢が高かったことから、被虐待児の行動様式は年齢によって変遷していく可能性も示唆された。この点では、今後も縦断的な調査を続けてゆく必要があると思われた。

引用文献

Herman JL(-a): Complex PTSD: A Syndrome in Survivors of Prolonged and Repeated Trauma. Journal of Traumatic Stress 5; 377-391, 1992

American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4th ed (DSM-IV). APA, Washington DC, 1994

Terr L: Childhood traumas: An outline and overview. American Journal of Psychiatry, 148(1); 10-20, 1991

Herman JL(-b): Trauma and recovery: Basic Books New York 1992

安藤久美子、岡田幸之：虐待環境におけるコーピングスタイル.第回社会精神医学会 2000 年 3 月

Barker P: Clinical Interviews with children and Adolescents. W. W. Norton. New York. 1990

Romans SE, Martin J, Mullen P: Women's self-esteem: A community study of women who report and do not report childhood sexual abuse. British Journal of Psychiatry 169; 696-704, 1996

Green AH: Child Abuse: Dimension of Psychological Trauma in Abused Children.: Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry 22; 231-237, 1983

Brown GR, Anderson B: Psychiatric Morbidity in Adult Inpatients with Childhood Histories of Sexual and physical Abuse. American Journal of Psychiatry 148(1); 55-61, 1991

Straus MA, Gelles RJ, Steinmetz SK, et al: Behind Closed Doors. Doubleday, New York,

1980

Kalter N & Romber J.: The significance of a child's age at the time of parental divorce. American Journal of Orthopsychiatry., 51(1); 85-100, 1981Murphy SM, Kilpatrick DG, Amick -McMullan A, Veronen LJ, Paduhovich J, Best CL: Current psychological functioning of child sexual assault survivors: a community study. Journal of Interpersonal Violence 3(1); 55-79, 1988

Gunderson JG & Sabo AN: The phenomenological and conceptual interface between borderline personality disorder and PTSD. American Journal of Psychiatry 150; 19-27, 1993

Browne A & Finkelhor D: Impact of child sexual abuse: A review of the research. Psychological Bulletin 99: 66-77, 1986